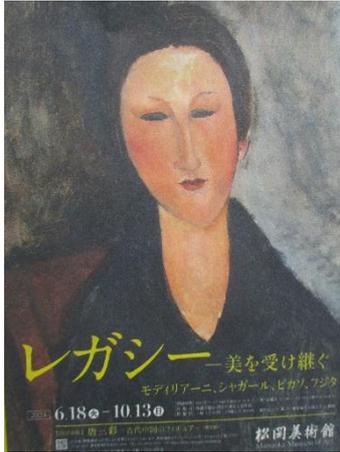


レガシー —美を受け継ぐ

モディリアアーニ、シャガール、ピカソ、フジタ

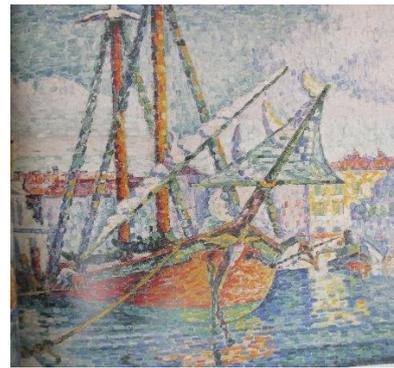
松岡美術館（白金台） 24.06.18～10.13



「松岡美術館」は、初代館長・美術館創設者「松岡清次郎」（1894～1989）邸跡地の緑豊かで閑静な住宅地にあり、彼が自ら感性のおもむくまま選び抜き、生涯をかけて築いた数多くの古代オリエント美術、現代彫刻、古代東洋彫刻、日本絵画、欧州近代絵画などの各分野より、定期的に「企画展」を開催している。

本展では、20世紀初頭のパリを彩った多様な表現を、当館のコレクションを紹介する企画で、フランス・パリに集まった多くの異邦人からなる「エコール・ド・パリ」、前衛的な表現を探求した「フォーヴィスム」や「キュビズム」「シュルレアリスム」に、日本からパリに渡った作家らの作品を鑑賞することができる。

モディリアアーニ《若い女の胸像（マーサー嬢）》1916年頃 油彩/カンヴァス
アーモンド形の顔に、時に瞳のない目は画伯の描く典型的な表現で、わずかな表情をたたえつつ、顔はいつもと同じように描かれ生き生きとしている。



M. ユトリロ 《モンマルトルの迷路》1942年 グワッシュ・鉛筆・紙
右手に風車、左手に寺院が見える貧民街で犯罪の絶え間ない地区であった「迷路」のイメージがある再開発途上の街の画面を描いた作品である。

P. シニャック 《オレンジを積んだ船、マルセイユ》1923年 油彩/カンヴァス
作品は、この地で別荘を構えて作成をしたもので、色彩は明るさを増して、点描のタッチは短形へと変化しモザイク画のような効果が生まれている。